

---

# 七人の小人少女

殿雌カシコ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

七人の小人少女

### 【NZコード】

N8913D

### 【作者名】

殿雌カシコ

### 【あらすじ】

バイトも終わり、くたくたになりながらも家路についた俺を待っていたのは、何とも有り得ない光景であつた…。七人の小人達が引き起こす、はちゃめちゃラブコメ「ディーここに開幕!」の予定

## 序幕 家を壊すのならまよ社を狙え（前書き）

小説初投稿です。一話一話がいちいち短いですが、投げ出さず温かい田で見てやつてください（――）＼

## 序幕 家を壊すのならまず柱を狙え

「なぜだ…」

バイトも終わり、くたくたになりながらも家路についた俺を待つていたのは、何とも有り得ない光景であった。

「みんなーー後一息だ！ 気合を入れていぐぞー！」

「おー！」

そこにいたのは七人の少女たち。彼女たちは、身の丈ほどもある巨

大なハンマーを振り回し

「せーの…どっせい！」

俺の家を破壊していた…。

何これ？ 新手のリフォーム詐欺？ 状況が全く掴めないんですけど？

そんな俺の混乱などお構いなしに、少女たちは黙々とその破壊活動を続けていた。ひとりは屋根を壊し、ひとりは壁を粉碎し、ひとりは柱を狙い打つて、そして…

「崩れるぞー！」

「どどどどどどどー！」

そんな大きな爆音と共に我が家は崩壊した。

それと同時に爆風が粉塵を伴って俺に襲いかかる。

「ぐわっー！」

俺は吹き飛ばされ、電柱に頭をぶつけた。

視界が一瞬で真っ白となり、少しづつ意識は遠のいていく。

薄れゆく意識の中、俺がみたのは跡形もなく崩れ去り瓦礫の山と化した俺の家と、何ともやり遂げた顔をした七人の少女たちの笑顔だつた。

## 第一幕 「何が箱に。では人は？」

目が覚めると辺りはすでにほんやりと明るく、俺はえらく長い間、気を失っていたのだということをこの時理解した。  
しかし、わからないことが一つ…俺は一体全体、どうしてこんな所にいるのだろうか？

「なぜだ…？」

気がつけば俺は、ゴミ捨て場に棄てられていた。  
しかもゴミ袋に入れられて、今は頭だけ出ている状態である。これは優しさなのだろうか？この寒空の下、せめてゴミ袋だけでもまとめて寒さを凌いでね。

嬉しいじゃないの、人間まだまだ捨てたもんじゃないね…て、んなわけあるかー！だいたい捨てられるの俺やがなー！

などと、そんな極寒の一人ノリつつこみを経て、俺は我に返った。

「…そうだ、俺の家…！」

そして思い出す。あの悪夢のような光景を。十人の少女がハンマーを手に俺の家をフルボッコ。俺が見たあの光景が夢でないのなら今俺の家は…

俺はいつもたつてもいられなくなり、袋姿のまま、尺取り虫のようになといずると我が家があるはずの方角を田指した。

：：

：

それから数分後…

「何じゃこりゃあ…」

やつとの思いいで戻ってきた俺はその光景に愕然とした。  
結果から言えば、あれは夢でも何でもなく、まいにじことなき現実で  
あり、昨日までそこにあった我が家はまるで初めから無かつたかの  
ようになその場から姿を消していた。

しかしあ、それは、実際その様子を目の当たりにしたわけだから  
覚悟はしていたことで…いや、すんごいショックなのだけれど、ま  
だ平静を保つていらざると思つていたのだ。

しかし俺はこの様に

「開いた口がふさがらない」といつ言葉を見事に体で表現している  
状態で…つまり何が言いたいのかと言えば

「豊臣秀吉の一夜城かつ！」俺の家があつたはずの跡地にはすでに  
家が建てられていた。

## 第一幕　一夜城は実は一夜ではつぶられない

俺は我が目を疑つた。

昨日まで確かにそこにあつた俺の家が、まったく別の家に取つて代わつていたのだ。

しかも俺が気を失つていた半日も経つていない間に。天下の一夜城でさえ一夜では建たなかつたというのに…

俺はまだ夢の中にいるのではないかと頬をつねつた。

「いへーよ

やつぱり痛かつた…。

俺はへたりとその場に座り込むと、茫然とその家を見上げた。短時間で造つたにしては立派な家だ。扉も窓もちゃんとついていて奥行きもある。どうやら張りぼてではなさそうだ。  
しかも無駄に一階建てで、全体的に丸みを帯びたその形はキノコのよう。というかキノコをモチーフにして造られたのかもしれない。屋根赤いし。

まるでおどき話にでも出てくるようなそんな家だつた。

「シリバニアファミリーかつつーの…」

正直この町にはまったくの不釣り合いで、ハンパなく痛々しいその家を眺めて…俺はふと考えた。

これつてやつぱり「近所からみたら、俺がリフォームしたように思われるのかしら?」

「あら奥さん。見た? あのお家、プーくすくす

「見た見た。趣味疑つちゃうわよねー、プーくすくす

そんな『近所での会話が脳内で流れ出す。

「…は、」

恥ずかしすぎるから…俺何にも悪くないのに社会から爪弾きにされるやう！

もはや家を壊されたことよりもショックキングなこの事実に俺は動転した。何とかしなければ！

俺は素早く立ち上がるとその家の玄関へと走り寄った。よく見れば扉の横にはいつちょ前にインターホンなんかがついていて…てかれ俺んちのインターホンじゃねえか…！

俺はもうもうの怒りを口の指にこめてそのインターホンをブツシュした。

## 第三幕 人生わからないから面白いとよく言つが、それは成功者だから言える

ピンポーン。

締まりのない電子音が鳴る。その音を聞き、俺はこのインターほんが間違いなく俺の家のものであることを確信した。何故わかつたのかと言えば、うちのそれは普通のものより無駄に高音であり、音程も若干おかしいからであるのだが……まあ、今はどうでもいいことだ。置いておこう。

しかしさかこんな形で、自分の家のインターほんを鳴らすときが来るとは思いもしなかった。人生何がおきるかわからないというが、俺のこの体験は世界屈指のものではないだろうか？

家を壊され、氣を失い、氣付けばゴミ捨て場に捨てられて、戻つてみれば別の家が建っていた……なんてとんでも人生、誰が予想できる？ わからない範疇を越えてるだろ。うん。

……。

……。

てか遅いよーちやさちやさ出でこよーじりあ！

苛々が頂点に達した俺がもう一度インターほんを押そうとした、その時だった。

「あはは～、誰～？」

何とも間の抜けた声がインターほん越しから聞こえてきた。

きつとあの時いた少女たちの一人に違いないとふんだ俺は怒りにまかせて怒鳴り散らした。

「あのー！？この場所に住んでいた者なんですけどもー！？」

何故か敬語で…

「ここ元々俺の家があつた場所なんですが！？あなた達は何の権限があつて俺の家をぶつ壊して、この場所にこんな家をお建てになつたんでしょうかー！？」

言葉づかいはアレだがこれでも俺は怒り心頭で、今までの人生の中で一番荒々しい一面を見せていたと思つ…キノコハウスの前というのが非常に残念であるが。

返答によつてはそのまま突入して文句を言つてやるつと思つていた程だ。

しかしそんな俺の決意は虚しく肩すかしを食らつくなる。

「あはは～、合い言葉は～？」

インターホンからは返つてきたのはそんな俺の予想の斜め上をいく返答だつた。

流石の俺もこれにはキレた。

「アリババか！」

キレてる俺のツツ「ミにキレがないのはこれ如何に…あれ？今俺うまいこといった？てか合い言葉つてなんね？」

## 第四幕 犯罪はなかなか拭えない

前回までのあらすじ

突然の合い言葉要求にまさかの

「アリババか！」 ツツコミ。そして俺はつまごとを言つ。

「ありばば～？ あはは～、違うよ～。合ひ言葉が違うよ～」  
どうやら俺のツツコミを合ひ言葉だと勘違いしたらしい。  
いや、そりや違うでしょつよ。これが合ひ言葉だつたら俺だつて笑  
うわ。

「あと10回間違えたらアウトだよ～」

「……」

まだそんなにチャンスあんのかよ…などと心の中でツツコミをいれ  
つつ、さすがにこれ以上は付き合いきれないと、俺は一時的に怒り  
鎮め、大人の対応でこの状況の打開を図ることとした。

「悪いけど、今はそんな遊びにつき合つてている暇はないんだ。ここ  
を開けてくれないか？」

「駄目だよ～。合い言葉を言わないと入れてあげないよ～」

あくまでも合い言葉にこだわる少女。ふふ、では仕方がない。大人  
の対応と言つものを見せてやろう！

「開けてくれたらお菓子あげるから、ね？ いい子だから開けてよ。」

大人の対応。それ即ち買収なり。これぞ大人のやり方よ！ さあ、わ  
っぱ！ この誘惑に耐えられるかな！？

俺は勝利を確信して、相手の言葉を待つた。しかし彼女の口から出  
た言葉はまたしても俺の予想を大きく裏切るものだった。

「知らない人からモノを貰つちゃいけないっていわれてるから駄目だよ」

ええええええ！？

人の家壊しといて何でそんなとこだけ常識的なさー？てか今俺完全に不審者扱いされてる！？

「じゃあ私、色々忙しいから」

「ちょっと待つて！何その余所余所しい態度！さつきまであんなに馴れ馴れしかったのに！？俺は別に怪しいものじゃ……」

ブツンッ

俺の弁解を最後まで聞くことなく、その通信は途絶えた。

「…何故だ」「俺はその時本当に泣きたくなつた…」

土地を奪われた挙げ句の果てが変質者扱いなんてあんまりだ。理不尽すぎる…。

「つはああ～…」

俺は扉に背を向けると、まだ登り切つていらない太陽を見上げ、大きくため息をついた。

「はあ、もうどうでも良くなってきたな…」

リストラされた中年サラリーマンのようなことを呟く俺。そんな俺の発言は、すでに負け組入り決定なんぢやないかなー、なんてどうでもいいことを俺に考えさせて、尚更俺を鬱にさせた。

「はあ…」

もはや俺はため息の大売り出し状態である。

そんな今の俺には、周りを気にする余裕もなく

「おこ、誰だお前？」

その少女の接近にまつたく気がつかなかつたとしてもおかしくない  
だらうと思ひわけで……。

「そんな所に立つてたら私が家に入れん。せつせと去ね、しつしつ  
！」

……とつあえずこの子を殴つていいのかナ？

## 第五幕 「キモい」より「気持ち悪い」の方が男としては傷つきやすい

「ほり、散つた散つた！夜中の作業で疲れてるんだ、私は「俺が呆気にとられているのをいいことに、さつさとキノコハウスに入ろうとする少女。いやいや、ちよいとお待ちよお嬢さん。

「ちょ、待てつて……！」

登場そこそこに退散しようとすると彼女を、俺は彼女の腕をとつて引き留めた。

「何だ？」

そんな俺をギロッと睨む少女。別に睨まんでもいいでしょう……マジ怖いんですけど。

彼女の視線に少し怯みながらも、俺はそこで初めて彼女の姿をきちんと確認する事ができた。

その少し低めの声や独特の喋りとは裏腹に、彼女は非常に小柄な少女であった。その身長は俺の腰ほどの高さしかなく、それから考えれば彼女の身長は120センチもないだろうと思われる。

そんな彼女の装いは赤色のチュニックに黒のパンツルックで、足にはやけに先のとんがつたブーツを履き、頭にはヘンテコな布製の帽子を被っている。

ファッションに特別詳しい訳ではないが、全体的に奇妙な出で立ちをしているようだと思つ。主にその帽子とか、帽子とか……。

まあしかしだ。ここまでならただの奇抜でおしゃまな小学生ですむ話で、まだ常識の範囲内だと言えるかもしれない。

しかし、そのヘンテコ帽子からびるよつに生えた真っ赤な長い髪と、それに合わせるように光る真っ赤な目。さらにその髪の間から覗く、彼女のやけにとんがつた耳がこの少女が常識の範囲などどうに超越した、ただ者ではない人物だということを俺に示していた。

てか本当に何なのこの子…髪は染めてるとしてその目は何よ?カラーコンタクト?これが俗に書く「スプレッテ奴なのだろうか?それでも気合いは入り過ぎだろ。

そんな恐るべ日本オタク文化に若干引を…気圧されていた俺だつたが

「…何を見ている、気色悪い」

そんな彼女の胸をえぐるような言葉により我に返った。少女はまるで変質者でも見るよつた目で俺を見ている。

「この変質者が」

「いや、変質者として俺を見ていたよつだ。ちょっとあんた。そりやあんまりにもヒドくない?」

本日一度田の変質者扱いにショックを受けつつも、これ以上変質者扱いされてはたまらんと、俺は急いで弁解に回った。

「違う!俺は変質者じゃない!」

「変質者は誰しもそう言つんだ」

はい、墓穴。もう何を言つても俺は変質者確定らじ。

…そうかい、そうかい。そういうことならけしからこも考えがあるんだからね!

あまりの理不尽さに、もはや崩壊した俺のロミシター…

「ふつふつふつ…バレちゃあしようがない!…わざわざ…俺は生糞の変質者!悪戯されたくなかったら大人しくこの家を明け渡し、この場からそつそつに立ち去るがいい!」

気がつけば俺は住宅街の一角で声高らかに変質者宣言をかましてい

た。

## 第五幕 「キモい」より「気持ち悪い」の方が男としては傷つきます（後書き）

作者は100cmの長さがよくわからなかつたため、今更ながら小人の身長が30cmほど縮みました。150で結構でかいわ（^ ^ ; ）さらに縮むかも・・・

## 第六幕 楽園つてのは意外に近くにあるのかも知れない

「ふつふつふつ…バレちゃあしようがない！そりゃー俺は生糸の変質者！悪戯されたくなかったら大人しくこの家を明け渡し、この場からそうそうに立ち去るがいい！」

俺のそんな突拍子もない発言に、彼女の顔は見る見るうちに青ざめていく。人がドン引きした瞬間というものを、俺はこの時初めて目の当たりにした。

「よ…寄るな変態！」

さつきまで気丈な態度をとっていた少女は、一転して慌てふためいている。

そこで俺は思ったね。

あれ？これイケンジャネ？と。

血迷ったことを言つてしまつたと思ったが、このまま脅しをかけていけば彼女は逃げ出し、とりあえず土地だけは取り返せるかもしないぞ？…と。

しかし彼女を追い払つても、この扉が開かない以上、この土地の奪還などあり得ないわけで、その考え方自体がすでに血迷つているわけだが、どうにもこうにもその時はそんな期待が先行して俺は間違いに気がつかないまま、その変態トークによる畳みかけに入つてしまつた。

「ぐつへつへつ、お嬢さんの柔肌をタッチング！そして俺はヒーティング！」

言い逃れようのない変態の出来上がりである…。

「……」

そんな俺にて、もはや言葉もでないような彼女。彼女は俯き、腕を震わせている。

その様子に

「あらあら、泣いた？ ちょっとやさしきたかしらホホホホホ  
何て罪悪感を感じていると、

ピンピコローン

変な効果音とともにどこからともなくあの巨大ハンマーが出現した。あれ? どこから出したんだですか、そのハンマー? そしてあなたは何故それを大きく振りかぶつて…

「死にやらせ…！」

その言葉と同時に、彼女はその巨大ハンマーを恐ろしいスピードで俺目掛けて振り下ろした。

「へ？」

その速さは体育の成績3（五段階評価）といつ平々凡々な俺の運動能力では到底かわし切れるものではなく、しかもそんなスピードで巨大なハンマーが振り下ろされるのだから当たれば即死確定。

やばっ…

今更ながら生命の危機を感じ取った俺だったが、時すでに遅し。ハンマーはあつと叫び間もなく距離をつめると、俺の視界をその身で覆い尽くした。

そこには田を背ける隙はあるか、死を覚悟する余裕すらもない。あるいは一瞬の恐怖と一生分の後悔のみ…

あーーあんな発言しなきやよかつたあー、ぎゃあああー、マジで死ぬう！

死神の鎌ならぬ少女のハンマーは直撃まで後ほんの数センチという

といひ今まで俺に迫り

「止めてリダ……」

ピタリと、その動きを止めた。

「あ……あ……？」

よくわからないが……助かった?

そうわかつた瞬間、体中から汗がドッシと噴き出し、俺は膝から崩れ落ちた。

どうやら恐怖がやつと体にも伝染したらしい。

マ、マジで本当に恐かつた!生きて良かつたよー!

「姫……止めるな。こんな変態は死んだ方が世のためだ」

俺がそんな風に生きていることを実感している中、もはや俺のことなど見もしないで少女は俺を隔てた誰かと話している。

そういうや誰かの叫び声が聞こえたような気がする……やめてとかなんとか。ありがてえ、どなたか存じ上げませんがあんたは命の恩人ですよー!

俺は少女の視線の先にいる救い主にどうにか御礼を言いたくて立ち上がろうと体を動かした。

しかし、恐怖で縮こまつた体は思つように稼働してくれず、

「あ、あら?」

俺はバランスを崩し、ステンと背中から転げ、仰向けに倒れた込んでしまった。

「え？」

結果。俺は寝転んだ状態で、その恩人と対面したわけだが……どうしてこのアングルは、礼を尽くすこの状況には適さないようだ……

「う…………ー」

彼女の顔はあつとこいつ間に真っ赤になり、そしてみるとみるみるうちに憤怒の表情へと移行する。あーあ、結局このパターンかい。

俺は次にくる展開を見越し、もうどうせならもつと見てやろうと首を亀のように持ちあげて、天井の楽園を凝視した。しかしそれがいけなかつたのか、

「！」、この変態！

がすん！

彼女に思い切り顔面を踏まれたことにより、俺は頭を打ちつけてしまい、俺の意識はまたすつ飛ばされることとなつた。

いや、もう死んでも悔いないですけどね～。なんてことを思つてゐる俺つてやつぱり変態なのかと考へてしまつ十五の朝方のお話……。

## 第七幕 腐つても親は親。皆さん、親孝行をしまじょう

俺が幼い頃、仕事の関係で海外を飛び回ることが多かつた親父は、家に帰るのも年に一二三度とかいうペースであり、当時の俺といえばそんな根無し草な親父がいつ帰るのかと待ち望みながらもキャッチボールをする親子を羨望の眼差しで見てしたりと、なかなか可哀想な幼少期を送っていた。

しかしうちに帰れば、明るく破天荒な母が笑顔で俺を迎えてくれたし、月に一度とはいえ帰ってきた親父は俺との時間を第一に考えて遊んでもくれた。

なので決して寂しいということではなく、寧ろ幸せな家庭だと思つていたくらいだ。  
絆の深い家族だと思っていた。血縁できる家族だと思っていた。その頃俺はそう信じたのだ。

しかし、そんなものは俺が中学の卒業式を終えた翌日に泡となり消えた。

「あのね、パパとママは離婚することになつたの」

親父の帰国と俺の卒業祝いを兼ねてビービーのレストランで食事をとつていた最中、突如として我が母はいつも見せないような至極真面目な表情で、そんなことをのたまつたのだった。

「は？」

その発言に対し、俺は口に運ぼうとした料理をポロリと落として、

思わず間抜けな声をあげてしまった。

母上様、今なんとおっしゃいまシタカ？ 確か離婚がどうとか…いやいや、ありえねえつしょ？ いくら春とはいえ今はまだ3月ですぜ。エイプリルフールはまだ先だよ、このオッヂョ「チヨイめ！」

「嘘でも言つていい」と悪いことがあるぞ。第一今日は祝の席なんだから、そんな不謹慎な冗談はよしてくれよ」

俺はなるべく平静を装つて、そつ返答してやつた。

すると母は急に一カツといつもの笑顔で

「『めんこめん』何て言つもんだ。

俺は内心ホッとしながらも

「勘弁してくれよ」とヤレヤレなジェスチャーをして、食事を再開しようとフォークを握り…

「嘘でも冗談でもないの」

今度はそのフォークを皿の上にカッシャーンと落としてしまった。

その音に他の客たちは何事かと一瞬俺たちの方を見るが、すぐに視線を自分たちのテーブルへと戻し、また食事に、談笑に花を咲かせる。

みんな楽しそうな笑顔で笑っている。例外は俺たちのいるテーブルのみ…てかさつきの笑顔は何だったんだよ！

「いや、私らしくないかなと思つて」

んなもん知らねえよ！

マジでキレイやいそうな俺は、どうにか落ち着こうとグラスに入った水を一気に飲み干した。まあ、こんなことで落ち着けるほど大人じゃありませんけどね！ほかあ！

空いたグラスを乱暴に置くと、俺はキッと母を睨みつけた。決して憎しみを視線にこめているわけではない。説明を求めているのだ。

「ちゃんと説明しろ」と。そのサインなのだ、これは。

母はそのサインをじつに読み取つたらしく、また眞面目な顔をして話し始めた。

「実はね、私。好きな人ができちゃつたの。その人は私の中学校時の同級生でね。少し前に同窓会があつたんだけど、その時再会してね。でもまだその時は別に懐かしいな、ってそんな気持ちだけだつたんだけど。何度か会つうちに惹かれあつたっていうの？お互い好きになっちゃつて。つい先日彼の方からプロポーズされちゃつたの。

「僕のパンツを洗つてくれ」とかなんとか…。正直それはどうよと思つ反面、凄くときめいている私がいて。でもね、私は

「一人ともいい年だし家庭もあるから駄目よ、こんなのは」ってね、言つたんだけど、そう断つたんだけどね私は。彼つたら

「僕はバツイチ子持ちだから全然OKだ！」何て言つもんだから、私またクラッときちゃつて…」

…なぜそんなに捲くし立てるように喋るのか、母よ？何はともあれ、

衝撃的事実発覚ですよ皆さん。

「つまり浮氣してたってことか？」

「……うん、そり……」

うん、そり……つじやねえよ！いい年扱いて何考えてんだお前は！

状況をようやく理解した俺の怒りはフルスロットルに。俺は母を叱咤し、罵るためにテーブルへと身を乗り出した。

「止めなさい」

しかしそんな俺を横から手で制する親父。親父は首を一三度横に振ると俺を席に座らせようと肩に手をおいた。

「何でそんなに冷静でいられるんだよ！」

「親父は裏切られたんだぞ！」等々、言いたいことは色々あったが、止めた…。

どんなに冷静であろうが一番傷ついているのは親父のハズだ。その親父がやめろと言った。これ以上母さんを責めるな、と…。ならもう俺がとやかく言つことでもない気がしたのだ。

俺は大人しく席につくと親父に視線を送った。親父はそんな俺の様子に力なく笑みを浮かべる。

「私は大丈夫だ」と俺を安心させるかのように…

この時俺は心に誓つたのだ。どんな事があつても俺は親父を裏切らないと。いつ帰ってきても俺だけはこの人を迎えてやろうと…

そう誓つたはずだった。

しかし俺はこの後、たつた今たてたばずのこの誓いをもの数十秒で撤回する事となる。

「まあ、それはさて置き……実は今日はお前に会わせたい人がいるんだ」

「は？」

いきなりのその発言とともに、ゼニから出てきたのが謎の女性が俺たちの前に現れた。

「シャツチョーサーン・マチクタビレタリー…」

片言な日本語。顔立ちも日本のそれとは違う。アジアンティイストな美女が親父の首に腕を回して抱きついてきた。

そんな彼女を親父は

「おじおい、こんな所でよさないか」何てなだめつつも満更でもない御様子で……えーと、つまりコレって……？

「紹介しよう。彼女の名はアイリン。見ての通りフィリピン人だ。彼女との馴れ初めはそり……一年前のある雨のことだ……」

……正直呆れてものも言えない状態だが、あえてつっこましてもうまい。

お前も浮氣してたんかい！

そこで、俺は田を覚ました。

## 第八幕 ペンクといえまむひがりこやひじこイメージ

悪夢とは1・「一度と見たくないような嫌な夢の類」を指すものと、2・「夢でしか起こり得ないような恐ろしい現実」を指すものの二種類がある。

詰まるところ言えば、さつきのはただの夢オチというものではなく、俺の実体験がそのまま夢として映し出されたものだったわけだから、両方の意味を兼ね備えた悪夢ということになる。…でもまあしかし、そんなどうでもいい事実に喜ぶのは「夢だけど夢じゃなかつた！」とはしゃべ少女達くらいのもんであり、「ぐく一般的ピーポーは「あつせ」とか「それで?」とか冷たい反応で話を切るか話を急かすわけです。

なんてまあ、そんなくだらない前置きはさて置いて…。

結局あの後、俺の両親は俺の田の前で離婚届けに判を押し合い、清々しいほどにさつぱりと離婚を成立させたのだった。

そして俺はといえば、何故か根無し草な父親に引き取られることがすでに決定しており、

「この場合普通母親じゃね?」と反論しようとも思つたが、よくよく考えてみれば再婚相手の家で、しかもじぶつきのアットホームで生活するよりは独りでこの家に残る方が何倍もマシなよつて思え、結局それを黙認した。

それが一年前の話だ。

今では一人暮らしもすっかり板に付き、それなりに日々の生活を満

喫していたわけなのだが、皆さんもご存じの通り俺の受難はそれだけに留まらず、それどころか更なる悪夢にうなされたことになつた次第である。

そして周りを見るに、どうやらその悪夢は未だ覚めてはいよいよで、真っ赤な絨毯にピンク色の壁といつ、このファンシーの意味を履き違えたような部屋に俺が寝かされていたことが、それを如実に物語ついていた。

だから「ここはどうだ?」などとは言わない。あのキノコハウスの中だらうことは、想像するまでもなくわかることだから。気を失つた俺を見かねて今度はきちんとした場所に運んでくれたのだろう。

当然俺を殺しかけたチビッコではなく、多分おそらくだが…あの子が。

俺を助けてくれた姫と呼ばれた少女。あのアングルからでは顔はよくわからなかつたが、すらりとのびた手足は雪のように白く、長く切りそろえられた黒髪は絹のように滑らかで、それだけ見て俺は彼女が相当な美人だらうことを勝手に確信した。さらに言えば、俺はそんな特徴を持ち合わせた人物に一人だけ心当たりがあつたわけだが…。

「はっ、まっさか…」

よつじらせーと体を起こした俺は、自嘲氣味な笑いを漏らし、その考えを一蹴した。

ないないない。それはないって。何だつてあの人人がこんな所に…

「ん?」

「すぴー、すぷうー」

「……」

そして今更ながら気が付いた。自分の股間あたりで何かが蠢くのを…  
そこにはいたのはこれまた少女だった。全体的にピンク色した少女が  
何故か俺の股の上で猫のように丸くなりスヤスヤ寝息をたて眠つて  
いた。

とりあえず俺はその子のことをピンクちゃんと命名することにした。  
ピンクちゃん! あんた一体何やってんの!?

## 第九幕 小学生は大概ジャンケンで何でも決める

前回までのあらすじ

起きて早々に前々回の夢の解説に入る俺は良く出来た主人公だと思った。そんなこんなでピンクの幼女が俺の股ぐらに…！？

PS・第八幕の題名に共感をもつた人はもっと広い視野で世界を見た方がいいと思うよ！

今俺の股の上でスヤスヤ寝息をたてて眠る少女は、その名をピンクちゃん（俺命名）という。

服装もピンク色。ふわふわと綿菓子のような髪もピンク色。だからピンクちゃん。

そんなピンクちゃんはさつきからまったく起きる様子もなく、未だ俺の股の上で眠りこけている。

一見何とも微笑ましい光景のように見えなくもないが、俺はそんなピンクちゃんをじっと見つめ、ゴクリと息をのんだ。

決して

「ゲへへ、ピンクちゃん可愛いぜえ」などといかがわしい事を考えているわけではない。

俺はこの少女に恐怖しているのだ。

なぜならこの少女の出で立ちは、どこか見覚えがあるものだったから。

桃色のチュニックに黒のパンツ、やけに先のとんがつたブーツ、そしてヘンテコな布製の帽子…。色こそ違えど、その服装はあのリダとこの少女とまるつきり同じものであり、つまりそこから導かれる

答えはたつた一つで…

『ピンクちゃんはあの赤豆太郎の仲間!』

答え合わせをするまでもなく、そういう結論に達することができる。まあ、この家が乗っ取られたことを考えれば服装など見ずとも彼女が俺の家の仇であることは至極当然にわかることだが。とにかく俺をへしゃんこにしようとした少女の仲間が俺の股の上で寝息を立ててこることこの状況は俺にとって恐怖以外の何物でもない。

「もうマジ帰りてえ…」

帰る家はここだというのに、そんなことすらすでに忘れて俺は早くも戦意喪失。しつぽまいて逃げる気満々だったわけだが、どうにもこのピンクちゃんが俺を抱き枕よろしく布団共々抱きしめているせいで身動きがとれない状態である。

怖いからなるべく起こしたくはないのだが…ここで彼女を引っ剥がそうと手を出せば、きっとまたしても俺は変態扱いをうけるに違いないことは先の経験でおおよそ予想できることで、どうせ赤豆太郎があのドアを突き破つて「寝込み襲うなんて人の風上にもおかないなーこのど変態が!」などとのたまひ、またあのハンマーで殴りかかるわけですよ。わかつてんですよ!パターン読めてんです

よー

しかし、だからと言つてこのまま手をこまねいでいるわけにもいかず、どうしたもんかと考えていた俺はふと閃いた。  
つまりは彼女に触れなければいいのだ。なら…

思い立つたが即行動と俺は掛けてある布団を手に取った。そして手間取りながらもその掛け布団をピンクちゃんを中心として端からたたみこみ、その端と端をしっかりと結んだ。

「よし！」

俺はしてやつたりの顔で俺の股の上のピンクちゃんのなりの果てを上から眺めた。

目の前には大きな包みが一つ。無論これは布団に包まれたピンクちゃんである。これならばピンクちゃんに直接触れることなく彼女を排除する事ができ、尚且つ万が一にも破廉恥な行いをしていくように見えない。あれ？俺天才じゃね？

「てかこんなになつてもまだ寝てるつて…どんだけー」

俺はそんなピンクちゃんに少し呆れながらも目的を果たすため袋の結び目を両手でつかみ、持ち上げようと腕に力を込めた。

しかしこの体勢で、しかも子供とはいえ人一人を持ち上げるというのは相當に筋力を使うもので、さらに言えば袋にされた（包まれた的な意味で）にも関わらずピンクちゃんは未だ俺の股にがつしりとしがみついているため、結局のところさつきから少しも動いていいといふのが現実で…

「無理」

そう早々に悟つた俺は袋から手を離し、誰に見せるわけでもなくアメリカンコメディをながらにお手上げのポーズ。

ふふっ、非力な俺を笑いたければ笑うがいいさ…。でもね、結果よりその過程にこそ意味があると僕は思うよ！

一体どの過程にどのよつた意味があつたのか定かではないが、とにかく

かくやれるだけのことはやつたと俺は半ば投げやりにまたベットに寝転がった。

「何やつてんだお前は…  
「どうわつー?」

しかしそれも束の間。言い訳全開フルスロットルの俺は、目の前にまたしても現れたあの赤い悪魔の再来にびっくりドンキリ飛び起きて、ついでに口も滑らした。

「あ、赤豆太郎…！？ いつの間に！？  
「…お前相当死にたいらしいな？」

レッドデビルは邪悪な笑みを浮かべ、五本の指を堅く握りしめた。  
何？ ジャンケンでもしようつての？ そつでしょ？ そつだよね？ それ  
じゃ、じゃーんけーんぽげぶう！

俺は手をパーで突き出しながら赤豆太郎にグーで顔面を殴られた。  
でもジャンケンには勝つたよ！ 試合に負けて勝負に勝つた！ ん？ 逆  
か？ ま、いいやー！ 誰か褒めて！ てか痛えええ！

殴られた頬をおさえ、ベットの上で悶え苦しむ俺。それをまるで汚物でも見るような目で見ながら赤豆太郎はため息をつく。そして如何にもめんどくさそうに、俺に向かつてこう言つた。

「来い変態、姫がお呼びだ」

## 第九幕 小学生は大概ジャンケンで何でも決める（後書き）

評価が一向につかないもんで「ハイハイ、どうせ誰も読んでないん  
でしょ…」何ていじけていたら今回評価を頂いて作者は大変喜んで  
あります。いや、ホントに。他にもこんな作品を「はんつ」と鼻で  
笑つて見てくれる人がいれば嬉しいです。え？オチ？ありませんよ  
？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8913d/>

---

七人の小人少女

2010年10月9日11時14分発行